

委員会名	自己点検者（委員長名）	①当該年度の活動内容の概要 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	②委員会内での自己評価と問題点の抽出 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	③次年度の改善方策 （箇条書きで良く、参考資料は不要）
学則等検討委員会	学則等検討委員長（杉山重夫）	<p>2021年度は以下の9件の学則等の検討が依頼され、委員会においてその原案を検討し、その結果について依頼先に伝達した。</p> <p>①学校法人明治薬科大学ハラスメント防止委員会規程、②学校法人明治薬科大学ハラスメント調査委員会規程、③明治薬科大学教員選考規定、④学校法人明治薬科大学大学院学則 明治薬科大学特任教員に関する規程、⑤学校法人明治薬科大学における公的研究費の不正使用防止に関する規程、⑥学校法人明治薬科大学における研究活動上の不正行為への対応に関する規程、⑧明治薬科大学学部学則、⑨学部学生及び大学院生の学外への派遣に関する誓約書</p>	<p>1）当委員会において、円滑に学則等の案の検討がなされ、より良い学則等の施行に寄与した。</p> <p>2）まれなケースではあるが、検討依頼が集中した際、回答までに時間がかかった。</p>	<p>検討依頼が集中した際は、優先順位を付けて検討することが望ましい。</p>

委員会名	自己点検者（委員長名）	①当該年度の活動内容の概要 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	②委員会内での自己評価と問題点の抽出 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	③次年度の改善方策 （箇条書きで良く、参考資料は不要）
FD委員会	委員長（中舘 和彦）	<p>(1) FD委員会を中心に、教員の教育の質向上のための方策を検討している。</p> <p>(2) FD研修会として、3回の研修会を実施した。①コロナ禍での学習効果の維持、更なる向上のため、「学習効果を高めるオンラインを活用した授業」と題した研修会を実施、②カリキュラムポリシーの観点から、「カリキュラムの作成と学習効果」と題した研修会を実施、③研究倫理として、「研究者が知っておくべき研究倫理の実践」と題した研究会を実施した。</p> <p>(3) 学生による授業アンケートを実施し、高評価の教員を選抜し表彰した。</p>	<p>(1) 本学におけるFD活動は概ね適切に実施されている。</p> <p>(2) 年3回のFD研修会の実施により、広いテーマに沿った研修会で教員のモチベーション向上に寄与している。</p> <p>(3) コロナ禍で集まった委員会の開催が困難であったためメール会議で会議を行った。各委員からの意見は反映できていると感じられるが、コロナ禍の終息が見れば対面での会議も検討したい。</p>	<p>(1) FD研修会の適切な開催時期や研修内容を検討した上で、学事スケジュールとの調整を行ない開催する。また、FD研修会など現在行っている活動意外に、FD活動の場があるか検討していきたい。</p>

委員会名	自己点検者（委員長名）	①当該年度の活動内容の概要 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	②委員会内での自己評価と問題点の抽出 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	③次年度の改善方策 （箇条書きで良く、参考資料は不要）
地域貢献委員会	地域貢献委員長（日堂 修）	<p>(1)大学の公開と地域住民への貢献を目的として、4月～12月の第三日曜日に市民大学講座『自然と健康を考える』を、年間36コマ程度の開催を予定していた。COVID-19禍の中、高齢者の参加が多いことを勘案し、対面での開催を断念して2回のWeb開催を行なった。</p> <p>(2)清瀬市の『きよせの環境・川まつり』に参加した。COVID-19禍の中、野外での開催は中止となった。市役所ホームページに特設サイトが設けられ、そこで本学の紹介と紫外線に関する動画を公開した。</p>	<p>(1)COVID-19禍、規模の縮小、対面での開催中止はやむを得ない状況であった。</p> <p>(2)予想よりも、多くのアクセスがあった。</p> <p>(3)動画は最後まで視聴することが少なかった。</p>	<p>(1)COVID-19収束の場合には、従来の対面での開催を行う。</p> <p>(2)現状が改善されない場合には、Web開催を充実する。</p>

委員会名	自己点検者（委員長名）	①当該年度の活動内容の概要 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	②委員会内での自己評価と問題点の抽出 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	③次年度の改善方策 （箇条書きで良く、参考資料は不要）
公開講座・シンポジウム委員会	松井勝彦	<p>地域住民との交流を深めること、また、子どもたちの理科離れを防ぐことを目的として、年間3つの公開講座を開催している。（1）2021年7月5日（月）より、4週間の期間限定Web配信にて明治薬科大学市民公開講座（講師：株式会社 結薬局 代表取締役 森田元 先生、テーマ：薬剤師が実践するアンチ・ドーピング活動の紹介）を開催した。（2）2021年7月末に日本医科大学との連携公開講座を開催する予定であったが、コロナウイルス感染拡大防止の観点から中止となった。（3）2021年11月8日（月）より、3週間の期間限定Web配信にて明薬祭特別講演（講師：がん研究会有明病院 薬剤部シニアアドバイザー 濱敏弘 先生、テーマ：がん薬物療法の進化と、がん患者を支える薬剤師の真価 ～がんを知る～）を開催した。開催した公開講座は、いずれも好評であり、多くの参加者を得た。</p>	<p>計画した公開講座は、概ね適切に実施されたが、対面式の講座開催を実現する必要があると考えられた。</p>	<p>（1）より多くの参加者を得るため、宣伝活動を強化し、Web配信の期間も長くしたい。（2）徹底したコロナウイルスの感染防止策を講じることで、対面式の公開講座を実施したい。</p>

委員会名	自己点検者（委員長名）	①当該年度の活動内容の概要 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	②委員会内での自己評価と問題点の抽出 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	③次年度の改善方策 （箇条書きで良く、参考資料は不要）
研究倫理審査委員会	研究倫理審査委員長（石川 洋一）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究倫理審査委員会規程に基づき研究倫理審査委員会を適正に実施、また学内の研究倫理適正化に向け提言を行った。 ・ 2020年度からの2組の審査担当による迅速審査方式を拡大実施して審査の円滑化を計った。 ・ 研究倫理審査委員会はTEAMSによるweb会議を継続した。 ・ 学内の研究倫理教育の強化に向け大学に提言を行い学生への講義に倫理教育を加え、教員教育にFD講習会を実施した。 ・ 人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針ハンドブックを委員全員に配布 ・ 臨床研究時の学生採血に係る学生保護に向けた規程策定、そのための保健室契約に係る提言を進める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究倫理審査委員会は適正に実施され、また学内の研究倫理適正化に向けた提言も適正に行われた。 ・ 臨床研究時の学生採血が倫理上十分適正に実施されていない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 臨床研究時の学生採血に係る学生保護に向けた規程策定、そのための保健室契約に係る提言を進める。

<p>①当該年度の活動内容の概要 (箇条書きで良く、参考資料は不要)</p>	<p>②委員会内での自己評価と問題点の抽出 (箇条書きで良く、参考資料は不要)</p>	<p>③次年度の改善方策 (箇条書きで良く、参考資料は不要)</p>
<p>薬品管理システム運営委員会を中心に、財務課や施設管理課と連携しながら、薬品管理システム（CRIS: Chemical Registration Information System, 島津トラステック）を利用した薬品の納入・廃棄・集計の管理を行った。なお、本学で取扱う薬品の範囲については、予め委員会で決定している。</p> <p>（１）薬品納入・廃棄について：研究室から既定のフォーマットで薬品を発注し、薬品卸入れ業者が納品データを大学へ送信する。業者が薬品を搬入後、財務課員が検収して薬品バーコードを貼付し、各研究室へ納品する。薬品使用後は廃棄薬品のバーコードを回収し、財務課員が検収室で廃棄手続きを行う。</p> <p>（２）薬品集計について：1. 東京都が指定する適正管理化学物質と、特定化学物質の環境への排出量の把握等及び管理の改善の促進に関する法律（化管法）に基づく、化学物質の排出量・移動量の届出（PRTR：Pollutant Release and Transfer Register 制度）指定化学物質について、本学における納入・使用・在庫状況を、東京都と関係省庁に報告した。2. 施設管理課が各研究室の薬品在庫状況を確認し、消防法による指定数量が超えそうな研究室に注意を促した。</p> <p>（３）保守について：CRISデータベースのマスターデータの更新を行った。</p> <p>（４）その他：1. 必要以上の薬品を保管しないようにするため、各研究室の不用薬品の回収を施設管理課が2回行った。2. 薬品在庫集計マニュアルの作成を行った。3. CRISの利用方法についてマニュアルを作成した。4. 発注書のマニュアルを作成した。5. 安全データシート（SDS：Safety Data Sheet）の検索方法を告知した。6. リスクアセスメント（RA：Risk Assessment）対象薬品の検索方法を告知した。7. 化学系若手教員1名を本委員会のメンバーに加えた。</p>	<p>（１）CRISを用いた薬品管理については、概ね適切な運用が行われている。</p> <p>（２）CRISによる集計操作がやや煩雑であり、化学物質に熟知していないと適切に集計できないという問題点がある。</p>	<p>（１）集計操作が誰でもできるよう、操作マニュアルの作成と、チェック体制を構築する。</p> <p>（２）各研究室へ薬品の棚卸を行うように促す。</p>

委員会名	自己点検者（委員長名）	①当該年度の活動内容の概要 （簡条書きで良く、参考資料は不要）	②委員会内での自己評価と問題点の抽出 （簡条書きで良く、参考資料は不要）	③次年度の改善方策 （簡条書きで良く、参考資料は不要）
バイオハザード安全委員会	バイオハザード安全委員長（森田 雄二）	<p>本学において取り扱う病原体等の安全管理に努め、本学における病原体等に起因して発生する曝露、及び感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律に基づく事故等の未然防止を図る。</p>	<p>新たな届出、認定申請はなかった。 特に問題点は抽出されなかった。</p>	<p>特になし</p>

委員会名	自己点検者（委員長名）	①当該年度の活動内容の概要 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	②委員会内での自己評価と問題点の抽出 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	③次年度の改善方策 （箇条書きで良く、参考資料は不要）
動物研究施設運営委員会	委員長（中舘 和彦）	<p>(1)動物研究施設運営委員会を中心に、動物研究施設の運営を実施している。</p> <p>(2)動物倫理講習会を実施し、実験動物の適切な飼育、実験運用を学生と教職員に促した。</p> <p>(3)動物管理施設への入退室に際し、カード登録を行い、適切な管理運営に努めた。</p> <p>(4)動物飼育管理者（株式会社JAC）との協議により、適切な運営費を執行した。</p> <p>(5)新規の教室運営教員（教授等）には、当該実験室での動物実験に関する指導を行った。</p> <p>(6)次年度実施予定の、外部審査のための施設内の管理、書類の点検を行った。</p>	<p>(1)本学における動物研究施設運営委員会活動は概ね適切に実施されている。</p> <p>(2)毎年、春に実施している動物倫理講習会は、今年度はオンデマンド配信と試験にて実施した。実施以降に必要な学生教職員にはその都度実施し、問題ない。</p> <p>(3)コロナ禍での動物実験の安全な実施のため、適切な準備と対応を実施した。</p> <p>(4)外部審査のため、実験管理区域内の設備の見直し、空調設備のチェックや管理簿等のチェックを実施した。</p>	<p>(1)概ね本年度と同様な運営を実施していく。</p> <p>(2)コロナ禍での対応に加え、コロナ禍終息後の対応に向けて対応が必要なところの有無を検討する。</p>

委員会名	自己点検者（委員長名）	①当該年度の活動内容の概要 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	②委員会内での自己評価と問題点の抽出 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	③次年度の改善方策 （箇条書きで良く、参考資料は不要）
認定評価委員会	認定評価委員長（川北 晃司）	<p>(1)認定薬剤師研修制度にもとづく当委員会は、学内委員9名および外部委員1名で構成されており、薬剤師生涯学習講座の受講者が認定申請の書類を提出した際に、CPC（薬剤師認定制度認証機構）のルールに則って審査を行う。</p> <p>(2)委員会審査がスムーズに運ぶように、申請書類の事前確認作業を2名の委員と1名の事務員により実施している。</p> <p>(3)委員会を5回開催した。第1回(4/26) および第3回（7/5）は対面式にて、それ以外の3回はメール会議にて実施したが、外部委員には全回来校いただき、認定評価委員長並びに研修企画実行委員長同席のもと、学内で申請書類を確認いただいた。</p> <p>(4)コロナ禍で集合研修が開催できない為、eラーニングでの単位取得が主となっている。それに伴い認定基準の改正をおこない単位取得方法に柔軟性を持たせた。</p> <p>(5)審査の結果、2021年度は新規2名、更新8名を認定し、認定薬剤師研修制度委員会へ報告した。</p> <p>(6)認定者へ認定証書及び認定薬剤師IDカードを送付した。</p>	<p>(1)本学における認定審査は適切に実施されている。</p>	<p>(1)他が「バ」の取得単位を多く申請するケースが増えてきている。地域の薬剤師会など研修会情報をホームページに掲載していない団体もあり、開催日等の確認が取れないと単位を認定できない。認定申請者が研修会の開催情報を保管し提出してくれるようにホームページ等でさらなる周知を行う。</p>

委員会名	自己点検者（委員長名）	①当該年度の活動内容の概要 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	②委員会内での自己評価と問題点の抽出 （箇条書きで良く、参考資料は不要）	③次年度の改善方策 （箇条書きで良く、参考資料は不要）
アジア・アフリカ創薬研究センター	アジア・アフリカ創薬研究センター長（深水啓朗）	<p>アジア域に生息する多種多様な天然物を新規創薬の資源と位置づけ、大学の研究者が海外学術協定締結機関とともに「がん、感染症、認知症」などの早期診断、治療薬の開発を目的として、以下に示す研究課題に取り組みます。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. タイ、フィリピンに生息する海洋生物由来抗腫瘍活性イソキノリンアルカロイドを基軸とする創薬研究 2. インドネシアやインドに生息する海洋由来真菌や薬用資源植物の探索並びに機能性生物活性分子の創製 3. 学部生の研究・教育を支援する海外拠点機関との相互交流：新たな実務実習研修先の開拓と継続的な国際交流の展開 	<p>コロナ禍で実際の人的交流は中止せざるを得なかった。</p>	